

2017年1月8日(日) 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 ヨハネによる福音書20章19節～23節

19 その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへイエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。20 そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。21 イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」22 そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。23 だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

説教 『神から派遣された福音の使者』

- ◆私たちは今年の教会の歩みの指針として、昨年と同じ主題聖句を与えられました。ヨハネによる福音書20章21節であります。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」この主イエス様の御言葉を、私たちは今、新たな思いで戴くのであります。今年この御言葉を再び主題聖句として与えられたということは、私たちのこれからの歩みが、初代教会の誕生にも比すべきものとして、新たな思いで歩むようにとの主イエス様の御心であります。また今年が宗教改革500年の記念の年であることも覚えておくと思います。
- ◆私達は今聖書の御言葉を聞きました。これは初代教会の誕生の次第であります。この箇所を「教会憲章」だと言った人もおります。つまり、ここには教会の根本規定が記されているという意味であります。そして同時にこれは人間の再生・復活・再創造の記事でもあります。私達がここを読む時、その人間再生の場面に立ち会いつつ、私達自身もそれを追体験するのであります。そして私達もその再生・復活に与るのであります。主の日に礼拝を捧げ、御言葉を聞くと、そういう事であります。
- ◆私たちは2週間前にクリスマス礼拝を捧げました。「クリスマス」は「キリストを拝む」という意味でした。私達はなぜイエス・キリストを神として拝むのでしょうか。その理由は唯一つであります。誠にこの御方がそれに値する御方だからであります。世の中には神と呼ばれ、神として拝まれている存在は多くありますが、なぜ、この御方が私たちにとって唯一の神であられるのでしょうか。私達が、この御方が徹底的に私たちに仕えて下さる御方である事を知らされたからであります。
- ◆私達は、「信じなければならない」ということはありません。私達が本当にこの御方を唯一の神として信じる時には、この事に反する一切のことに抗して、喜ばしく「我信ず」と告白するのであります。信仰は神様の恵みの贈物であります。信仰は、私たちが探求した挙句の果てに獲得できるものではありません。信仰は奇跡です。
- ◆主イエス・キリストの受肉、誕生、復活が奇跡であるように、復活の主イエス・キリストの御臨在を私達が信じるのも奇跡であります。昔、『奇跡の人』という映画がありました。ヘレン・ケラーとその家庭教師のサリバン先生の物語です。感動的な映画でした。歴史に名を残すかどうかはともかくとして、私たちキリスト者一人一人も、実に「奇跡の人」であります。何があっても神様に愛され、覚えられ、仕えられている「奇跡の人」であります。私達が今・ここにある事が神様の恵みの奇跡です。
- ◆19節にこうあります。「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ

人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた」と。私たち人間は生きていけば、実に様々な試練にあいます。一人一人の人間は、実存的には、いかなるテロの脅威にも劣らない危機の中に、ある日突然陥ることがあります。

- ◆イエス・キリストの弟子達は、正にこの日、そのような実存的危機に陥りました。どこにも逃げ場はありません。彼らは恐怖に閉ざされています。キリストを十字架に架けたこの世の権力を恐れ、潜み隠れておりました。極限の閉じこもり状態です。しかも、キリストが十字架で死刑になられたというだけではなく、弟子たちは皆、イエス・キリストとの関係を否認し、その師を裏切ったのです。彼らは、正に恐怖と悔恨の地獄に堕ちたのであります。しかし、そこへ、主イエスが臨まれ、「あなたがたに平和があるように」と語りかけられたのです。
- ◆この「あなたがたに平和があるように」という言葉は、ギリシャ語ですが、イエス様の母国語に戻せば「シャーローム」というヘブライ語です。「平和」とか「平安」を表す言葉です。これはユダヤ人の日常の挨拶語です。正に、彼らが恐れと後悔に閉ざされているその只中に臨まれて、いつものように弟子たちに「シャーローム」と挨拶されたのです。「あなたがたに平和があるように。」これほど意味深い挨拶はありません。どのような後悔も償いも後の祭りです。どんなことをしても取り返しがつきません。ですから弟子たちは後悔と恐怖の中でうずくまるしかありません。イエス様の「シャーローム」を、もう一度聞けるとは、夢にも思いませんでした。しかしイエス様の「シャーローム」には一かけらの恨みも感じられなかったのです。
- ◆それにしても、これが本当に現実のイエス様だろうかとの疑問が弟子たちにわいても不思議はありません。20 節にこうあります。「そうやって手とわき腹とをお見せになった」と。イエス様は実に聡い御方であります。顔の表情を読み取るばかりか、心中の思いを察し給う御方であります。ですから、手とわき腹とをお見せになったのです。それは十字架にかけられた時の釘跡と槍でさされた傷跡です。「弟子たちは主を見て喜んだ」とあります。まぎれもなく、自分たちが裏切り、十字架で死刑になったイエス様その方が、自分たちの真ん中に立ち、生前と全く変わりのない口調で、「シャーローム」と語りかけられたのです。
- ◆そしてイエス様は再度言われます。21 節です。「イエスは重ねて言われた。『あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす』」と。イエス様の御業は聖書が証しする通りであります。父なる神様から遣わされてイエス様がなされた御業と聞いた時、皆さん一人一人が思い浮かべる事はどのようなことでしょうか。昨年わたしはそれを「いやし」という言葉に集約しました。イエス様は、御許に来た「民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた」と聖書は記しています。この「いやす」という言葉は、病の癒しも含めてなのですけれども、元来の意味は「神に仕える」という言葉です。つまり、私達一人一人に神に対するように仕えてくださるのです。そして、私たちのためにご自身のすべてを犠牲にしても惜しまれないのです。そのようにわたしたちに接して下さるのです。それを「いやす」という言葉で表現しています。十字架と復活の主は、「いやし」を携えて来て下さいます。いかなる窮地に陥ったとしても、主イエスは、わたしたちの許に来てくださいます。救いの奇跡は必ず起こります。
- ◆その主イエス様が、21 節において、「父がわたしをお遣わしになったように、わた

しもあなたがたを遣わす」と言われるのですが、この「お遣わしになった」という表現は、私達には過去の聞こえますが、実はこれは「現在完了形」という時称で、「遣わされて、託された務めを、現に今・ここで果たしつつある」という意味になります。つまり今弟子たちに為さっていることが父から託された御業なのです。生前も、今も、未来永劫、イエス様は恐れに閉ざされた者たちの許に来て、平和と平安をもたらして下さる御方です。それが、父なる神様から遣わされて、今も現になさっておられる御業です。その業をあなたがたに託すと、この私たちに託すと、主イエス様はおっしゃっておられるのです。

◆今日の日曜学校では今年の主題聖句によって、説教しました。「ところでみんなにとってイエス様ってどんな人？」と問いましたら、果歩ちゃんが「不思議な力を持っている人」と、間髪入れずに答えてくれました。「不思議な力ってどんな力？」と聞きますと、「目の見えない人を見えるようにしてあげたり、歩けなかった人を歩けるようにしてあげたり、…」イエス様にはそういう力があるのだということをお子供たちと確認したわけです。なぜ、イエス様はそういうことがおできになるのだろうか。本当に不思議な奇跡が起こるけれど、それはどうしてだろうか。それは一人一人の人に対して、神様に仕えるようにイエスさまはお仕えになるので、普通では起こらないことが起こるのです。本当に私達がなぜイエス様を神様として拝むのかというと、神であられ、神の独り子であられ御方が、私達にとことん仕えてくださるからです。その様な事を子供たちと話し、その後、日曜学校で一番よく歌う讃美歌、「主、われを愛す」を歌いました。私は思わず、「あー、この讃美歌、いい讃美歌やねー。毎日、学校へ行く前に、今年の主題聖句とこの讃美歌を歌うことにしよう」と子供たちと約束しました。484番です。これは日曜学校の定番讃美歌です。私が時々引用しますカール・バルトは、最晩年アメリカに行つて講演しました。しますと、一人の人が皆の思いを代表して質問しました。「先生の今日の講演もそうなのですが、あの膨大な『教会教義学』で先生が書いておられることは、簡単に言えばどういうことなのでしょうかと。これに対してバルトは「皆さんがよく歌われる讃美歌484番で歌っているのと同じです」と答えたそうです。これは世界中の子供たちの愛唱讃美歌です。これを知らないクリスチャンはいません。私の今日の説教もこれに尽きます。実に素晴らしい歌詞です。これを歌い、今年の主題聖句を毎朝読みましょうと子供たちと約束しましたので、これからの日々、そのように過ごしていきたいと思っています。説教の途中ですが、一緒に484番を歌いましょうか。

<①主われを愛す、主は強ければ、われ弱くとも、恐れはあらず。(※繰り返し)わが主イエス、わが主イエス、わが主イエス、われを愛す。②わが罪の爲、さかえをすてて、天より降り、十字架につけり。※ ③御国の門を、ひらきてわれを まねきたまへり、いさみて昇らん。※ ④わが君イエスよ、我を清めて、善き働きを、なさしめ給え。※>

◆22節にこうあります。「そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい』と。今日初めに「今日の聖書の箇所は、初代教会誕生の次第であり、同時に人間の再生・復活・再創造の記事です。私達がここを読む時、その人間再生の場面に立ち会いつつ、私達自身もそれを追体験するのであります」と申しました。旧約聖書の冒頭には、人間創造様子が記されています。創世記2章7節です。「主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」その事をイエス様は今・ここで再現して

おられるのです。そのように造られた人間は、その自由と選択によって過ちを犯します。正に弟子達もそうです。そして悔恨と恐怖でどうにもならない弟子たちに、完全に滅んだ弟子たちに、「息を吹きかけて、聖霊を受けなさい」と、イエス様は言われます。これは正に人間の再生、再創造の業であります。どん底にある者、地獄に墮ちた者、完全に滅んだ者を再起させ給うのです。つまり息を吹き入れ、復活させる。イエス様は正に奇跡を為さっておられるのです。イエス様ご自身の命が弟子達に吹き込まれているのです。

◆主イエス様は恐れの中にある者と共におられます。医者でアフリカに行つて現地の人に仕えたアルベルト・シュバイツァーは有名です。オルガン奏者であり神学者でもありました。彼は使徒パウロの信仰の中心は何かを探りました。そしてガラテヤ書2章20節の「我生くるにあらず、キリスト我が内にありて、生くるなり。」これが復活、再生させられたパウロの信仰の核心だと言っています。

◆23節を御覧ください。「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」つまりすべての人の死活、運命が、弟子たちの手に委ねられるということです。途轍もない事です。人を赦すとか赦さないとかではなく、己が罪で今の今まで縮こまっていたわけです。そういう者に「誰の罪でもあなたがたが赦せばその罪は赦される。誰の罪でもあなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る」と。これは途轍もない使命の委託です。絶対の信頼であります。私の存在は、あるがままで、「絶対の赦罪」、罪の赦しの証しです。私達の存在、立ち居振る舞いが、絶対の恩寵、奇跡の証しなのです。

◆かくしてキリストの体なる教会は誕生しました。ですから人の罪を裁き、赦される御方は私たちの内におられる主イエス様その方であります。そのイエス様と一つにされた私たちも、身をもって罪の赦しに与った者として、イエス様がかつて為さり、今為さり、これからもなされるその御業に与る光栄に召されているのです。「罪」とは「的をはずす」という意味の言葉です。しかしいかなる的はずれ、見当違い、道の踏みはずしがあつたとしても、イエス様は、その人を捕らえ、もう一度息を吹き入れ、再起して下さいます。もう再起は不可能と人は言うかもしれませんが、しかし、イエス様は、復活、再生させて下さいます。正に私達はその恵みの生き証人です。

◆イエス・キリストは平和と平安をもたらすために世に来て下さいました。ですから、いかなる不安、恐れ、心配があるにもせよ、イエス・キリストによって解決されない問題はありません。私たちはこの2017年の日々を本当に新たな思いで歩みたく思います。主イエス・キリストは私達の内生きておられ、今も続けておられる平和創造の御業、人間再生の御業へ私達を召していて下さいます。これに代る大事な務めはありません。思いを新たにこの年の日々を歩んでまいりたく思います。

◆お祈りいたします。

憐れみ深い主イエス・キリストの父なる神様。あなたの御赦し、御憐れみによって、新年を迎えることができ、今、あなたをこのように礼拝できます幸いを心から感謝いたします。どうかあなたの御言葉を、この身に宿し、御言葉のままに私たちが生きる2017年の日々であらしめてください。そして、あなたのご臨在のご栄光が常に現れ、あなたの恵みと平和に導き入れられる人々が、次々に起こされますように、世界が平和になりますように、どうか、御心にかなう奉仕をなさしめてください。この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン。